

道徳の時間をがんばろう 2

～心に響く道徳の時間の展開を目指して～

平成24年8月9日発行

夏休みも折り返し点となりました。先生方は、有意義な夏休みを過ごされていますか。また、夏休み中も、子どもたちと上手にかかわりがもてていますか？

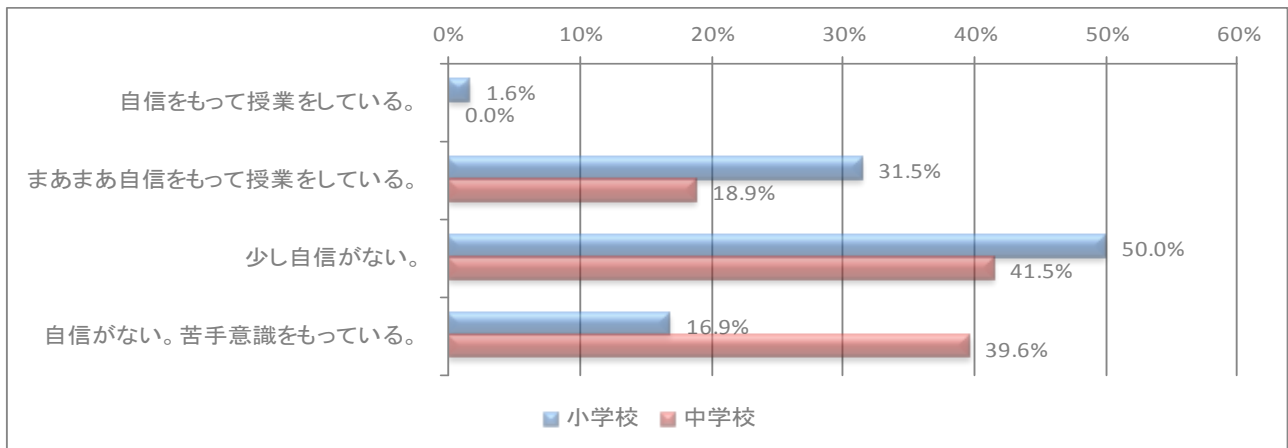
⇒ 参考資料 [「夏休みに学級担任がしたいこと」](#)

さて、今回は、道徳の時間について学んでいきたいと思います。下のグラフをご覧ください。



これは、今年度の6月に実施した「東部地区道徳授業研修会」に参加した先生方に回答いただいた、アンケートの結果です。この研修会は、原則として教職経験10年未満の先生方に参加いただきました。（小学校 124名 中学校 53名の先生方の回答）

【質問】 普段どんな思いで道徳の授業を進めていますか。

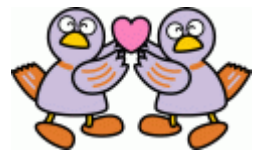


このアンケートでは、「少し自信がない。」「自信がない。苦手意識をもっている。」と答えた先生の合計が、小学校では66.9%、中学校では81.1%でした。

道徳教育の目標は、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うことです。

さらに、担任として道徳の授業をがんばると、

- ① 自分の考えをもち、発表できる子ども・学級に成長します。
- ② 友だちの意見を聞き、そこから考える子ども・学級に成長します。
- ③ 自他を認め、思いやりのある子ども・学級に成長します。



豊かな心をもった温かな学級となるとともに、学力向上の基盤である、互いに認め、学び合う学級になります。 ⇒ 詳しくは [「道徳の時間をがんばろう」](#)

東部教育事務所では、先生方に少しでも自信をつけてもらい、楽しく道徳の時間を展開できるよう支援をしていきたいと考えております。

現在日程調整中ですが、「授業エキスパートを目指す授業研究会（希望研修）」で、各教科のほか、道徳の授業研究会を予定しておりますので、東部地区の先生方は、ぜひ御参加ください。

⇒ [「授業エキスパートを目指す授業研究会」](#)（開催文書は、9月に発出予定）

1 子どもの心をゆさぶる授業展開を目指す

子どもたちが建前だけを語って進む授業では、心に響く道徳の授業にはなりません。子どもたちが本音を語り合える学級の雰囲気づくりを進めるとともに、教師の発問や「ゆさぶり発問（繰り返し発問）」から、多様な考えを引き出し、さらにそこから子どもたちに考えさせ、ねらいとする道徳的価値についての自覚を深める授業を展開しましょう。

そのためには・・・

① 授業の流れを考える。

（ここでは、葛藤資料での展開を例に話を進めます。）

- ・資料分析をもとに、どの場面（発問）で、どのように子どもたちに考えさせるか、子どもたちの反応を予想しながら考えます。



【葛藤資料での流れ】

共感



葛藤



覚醒

人間の弱さに共感させる。

人間の弱さ ↔ 道徳的価値

道徳的価値の自覚

※本音をださせたい。

「人間ってそんなだよね。」

すっきり！

でもね・・・とゆさぶる！

すっとんと落ちる！

② 発問を考える。

- ・共感の場面であれば、どんな発問にしたら、人間の弱さに共感できるか、学級の子どもたちの反応を予想しながら考えます。
- ・発問は、1問1答式でなく、多様な考えが出せるような発問を考えます。特に葛藤の場面では、「人間の弱さ」、「道徳的価値」の両面から多様な考えを引き出し、そこから子どもたちの考えをゆさぶることができるよう考えます。

※ この発問を投げかけたら、Aさんは、人間の弱さに共感する考えを発表するだろう、Bさんは、それに対して、「でもね・・・、私は違う考えで・・・。」と考えるだろうと予想します。（子どもの反応を予想することが、意図的指名につながります。）

この発問では「1問1答式の答えになってしまうな。」と予想したら、再度発問を検討しましょう。また、「道徳的な価値に迫る考えが出てこないかな。」と予想したら、補助発問を検討しましょう。



③ 「ゆさぶり発問」「繰り返し発問」等を考える。

- ・子どもの発言は、ピントがずれた意見であると考えても、まずは受け止めます。そして、「もう一度言ってくれるかな。」「どんな思いなのか説明してくれる。」などと子どもの思いを確認しながらやりとりを進めます。ピントがずれた意見だと思っても、実は自分の思いがうまく表現できていなかっただけという場合もあります。
- ・「悲しい気持ちです。」というような短いセンテンスの答えには、「悲しい気持ちについてもう少し教えてくれる。」とか、「どうしてそんな気持ちになったのだろう。」というように繰り返していきます。
- ・子どもたちの発言が一方にかたよる場合には、「先生は、みんなと違って、〇〇と

考えるのだけれど、みんなはどう思う？」と、教師があえて反対の発言をしてゆさぶる方法もあります。

このように、子どもたちの考えから話し合いを進め、ねらいの根底にある道徳的価値の自覚へと深まるよう、発問を工夫します。

2 子ども意見から、“柱立て”を行う方法



子どもたちから、“話し合ってみたいところ”を発表させ、柱立てをしていく方法もあります。子どもたちには、“自分たちが考えた話し合いの柱”という意識が生まれ、道徳の時間の話し合い活動が意欲的になります。

※子どもたちに、柱立てをすべて任せるではありません。子どもたちの発表を生かしながら、担任が考えた授業の流れ、発問で展開します。子どもたちの反応を予想して授業展開を考え、実施する取組を何度か進めていくと、子どもと担任とでつくりだすねらいへと深まる授業が展開できるようになります。

【柱立ての流れ】

① 子どもたちに、資料の範読を聞かせながら、“話し合ってみたいところ”に印をつけさせる。

② “話し合ってみたいところ”を発表させる。

※「〇〇の場面の、主人公の気持ちについて話し合ってみたいです。」

発表のルールを確認し、指導する。また、同じところに印をつけた人を確認しておき、意見を発表させるときの参考にする。

③ 担任は、子どもたちの発表から、3～4つの柱にまとめ、板書していく。

※子どもたちの発表を大切にす。事前に用意した短冊等を使わない。

(条件・状況を押さえるために使った短冊等を活用する場合はOKです。)

※「Aさん、Cさん、Fさんの話し合ってみたいところは似ているから、一緒にしてもいいかな。」と、確認をとりながらまとめていく。また、「先生からも一つ話し合いの柱を出してもいいかな。」と確認して、柱にしていくこともできる。

④ 柱について話し合う際には、「ここは、〇〇さんが出してくれたところだね。」と名前をあげてから話し合うとよい。



平成24年度 東部地区道徳授業研修会 より

リンクしています。「指導案」「授業の様子」「指導講評」等を紹介しています。